

奈良女子高等師範学校における「満州国」留学生

周一川

The article is to reveal the relation between Nara Women's Higher Normal School and the reconstruction of Manchurian educational system, and to clarify the actual situation of the Manchurian oversea students in Nara and their life after leaving there as well.

In fact, Nara Women's Higher Normal School was one of the most important education institutions for Manchurian Government to foster women teachers. The School took a positive attitude toward accepting women students from "Manchukuo" at that time, and it is the reason why almost all of the Manchurian oversea women students at government expense were sent there to continue thier study. Most of them devoted themselves to education even though they were dragged into the war for years.

キーワード：「満州国」、日本留学、奈良女高師、留学教育史、女子留学

はじめに

清朝末期から中国人留学生を受け入れていた奈良女子高等師範学校（以下奈良女高師と略称）は、1910年に清国政府の学部が指定した女子留学生に官費を支給する三校（東京女子高等師範学校〔以下東京女高師と略称〕、奈良女高師、蚕業講習所女子部）の中の一校である¹。

1932年3月1日に日本の関東軍の支持を受け、清朝最後の皇帝溥儀を執政として傀儡政権「満州国」は成立した。1934年からは、溥儀を皇帝として帝政を施き、年号は大同から康德に変わった。それ以来、「満州国」の日本への留学生派遣は十数年間続き、日本での中国人留学生は「中華民国留学生」と「満州国留学生」とに分けられた。奈良女高師もその例外ではなかった。

本論文は「満州国」教育の再建過程における奈良女高師の位置づけ、奈良女高師における「満州国」留学生の概況、彼女たちの帰国後のキャリアなどを明らかにしようとするものである。

一 「満州国」女性の日本留学と奈良女高師

1 「満州国」教育再建に欠かせない師範留学

1931年9月18日の「満州事変」後、戦乱の影響でほとんどの学校が閉校され、東北の教育は全面的に崩壊した。その後、東北大学、馮庸大学、東北交通大学は、関内に移転して開校したが、東北地方は「満州国」新学制が始まる1937年まで大学のない状況が続いていた。

「満州国」の成立直後は、閉校されていた学校の再開が急務であった。まず、張学良時代の三民主義を学校教育から排除し、四書五経を入れる²ことに着手して小中学校を中心に徐々に授業が再開された。現職教師の再教育のために、1932年4月から教員講習所が開設され、その後、それは中央師道訓

練所になり³、「満州国」教員の養成の機関であった。

教員不足を解消するために、文教部は、1934年国立高等師範学校を設立し、一般の留学生以外に在職教員の日本留学も取り入れて、1932～1937年までに毎年20～30人前後の教員留学生を派遣した⁴。

一方、高等教育機関は、最初に数か所の私立高等専門学校しかなく、「満州国」国立高等教育機関は、1934年に設立された高等師範学校（吉林市）と高等農林学校（奉天市）の2校のみであった。1936年末になっても大学はなく、10か所の高等専門学校などしかなかった⁵。

1937年5月に「満州国」では新学制が実施され、1938年になると、いくつかの高等専門学校が大学に昇格して、官立の新京医科大学も誕生した。吉林市の高等師範学校は新設の形で師道高等学校（男子部）になり、それに新京では分校の女子部が新設された。1940年に「満州国」の高等教育機関は、17か所になったが、医科大学が多く、師範高等教育機関は、高等師範学校しかなかった。

新学制により、学校の数や学生数の増加が見られ、「満州国」初めての女子の高等教育機関である師道高等学校「女子部」（1942年師道大学「女子部」に、1944年女子師道大学に昇格）が設立されたが、専攻が少なく、国語及家事、国語及裁縫手芸、音楽及体育の3班しかなかった⁶。1942年に師道大学になってからも「女子部」は、班が一つ増えた（家事及裁縫手芸、裁縫手芸及家事、音楽及国語、体育及国語⁷）だけで、内容の変化は殆どなかった。数学、物理、化学という理科専攻だけではなく、地理、歴史などの文科の専攻分野もなかった。「満州国」師範高等教育機関の不足や女性教員を育成する専攻分野の欠如は明らかであった。

以上の状況から、「満州国」は、男女とも師範学校への留学を重視し、民生部は官費制度により師範留学へ誘導する措置を取っていた。1941年の東京高等師範学校（以下東京高師と略称）の在學生31名、広島高等師範学校（以下広島高師と略称）の在學生34名、奈良女高師の在學生32名は全員官費生であり、1943年もそれぞれの22名、23名、23名の在學生は全員官費生であった。ほかには、1941年の広島文理科大学の在學生5名、1943年の7名（中女性2名）もすべて官費生であった。広島文理科大学の留學生は、殆どそれぞれの高等師範学校から進学した者であった。

1942年の官費生データはまだ見つからないが、1941年から、「満州国」民生部は、東京高師、広島高師、奈良女高師、広島文理科大学の在學生全員を官費生にしたと考えられ、そこから「満州国」が師範留学を重視していたことが読み取れる。「満州国」国内には師範高等教育機関が少なかったため、教員の養成は、日本留学にかなり頼っていたと言える。

2 奈良女高師と官費生

〈表1〉の女子官費生の分布と変動から、奈良女高師は、「満州国」の女子教員を養成する最重要な教育機関であったことがはっきり見てとれる。

〈表1〉 女子官費生人数と留学校の分布

年度	官費生数	女子官費生数	学 校 名 (女子官費生数)
1935	292	20	日本女子大 (8)、東京女子医専 (5)、帝国女専 (1)、武蔵野音楽学校 (1)、明治大学女子部 (1)、奈良女高師 (2) 東京高等女学校 (1)、玉川学園予備部 (1)
1936	358	20	東京女子医専 (6)、日本女子大 (5)、東京女高師 (3)、奈良女高師 (3)、明治大学女子部 (1)、武蔵野音楽学校 (1)、東京高等女学校 (1)
1937	311	23	奈良女高師 (7) 東京女子医専 (7)、日本女子大 (4)、東京女高師 (1)、東京女子大 (1)、帝国女専 (1)、女子美専 (1)、日本女子体育専 (1)

1938	281	19	奈良女高師 (10), 東京女子医専 (5), 日本女子大 (2), 東京女高師 (1), 東京女子大 (1)
1939	329	20	奈良女高師 (12), 東京女子医専 (5), 東京女高師 (1), 東京女子大 (1), 東京家政専 (1)
1940	271	15	奈良女高師 (10), 東京女子医専 (3), 東京女高師 (1), 帝国女子医薬専 (1)
1941	232	36	奈良女高師 (32) 東京女子医専 (3) 名, 帝国女子医薬専 (1)
1943	140	27	奈良女高師 (23), 広島文理科大学 (2), 東京女子医専 (1), 帝国女子医薬専 (1)

出典：駐日満州国大使館『満州国留日学生録』1938年～1943年各年度（欠1942年）「満州国留日学生録目次」と関連各校項目により作成。

1937年に新学制が始まってから奈良女高師の官費生数は一位になり、1941年からは、〈表2〉でわかるように、在學生全員を官費生にしたと考えられる。

〈表2〉 奈良女高師の在學生数と官費生数

年度	在學生数	官費生数
1938	12名	10名
1939	21名	12名
1940	26名	10名
1941	32名	32名
1943	23名	23名

出典：駐日満州国大使館『満州国留日学生録』1938～1943年各年度（欠1942年度）版「奈良女子高等師範学校」の項目より作成。

「満州国」官費について、筆者のアンケート調査票に王興栄は次のように書いている。「奈良女高師の生徒主事は留學生のことを管理していた。毎月、留學生たちは、寄宿舍費用などが差し引かれた官費をもらい、それは1945年8月まで遅れたことがなかった。」⁸

3 奈良女高師の対応

奈良女高師は「満州国」の学席制の指定校⁹になってから、積極的に「満州国」の留學生を受け入れた。本科だけではなく、「満州国」留學生を受け入れるため、「特設予科規程」も改定されたのである。従来の奈良女高師「特設予科規程」の第1条は、「奈良女子高等師範学校ニ入學セントスル中華民國ノ女子ニ対シ豫備教育ヲ施スガタメ特設豫科ヲ設ク」¹⁰という内容であったが、1938年6月の奈良女高師教第479号「特設予科規程中改正案」によって、「特設予科規程」が変わり、その第1条「中華民國」の前に「満州國及」¹¹という文字が加えられた。〈表2〉からわかるように、奈良女高師の「満州国」留學生も1941年までに年々増えていた。

留學生予備校を修了する前に、予備校から留學希望校の調査があり、一人につき二つの学校を志望することができた。留學生予備校の文系に進学したい多くの學生の第一志望は、官費生になれる奈良女高師であった¹²。しかし、奈良女高師の学席数は決まっており、希望者全員は行けないので、留學生予備校の担当者は各留學生の希望学校を参考にしながら、予備校の成績で留學先を決め、成績優秀な學生を奈良女高師に行かせるようにしていたのである¹³。時期によるが、奈良女高師に入学する際、「満州国」

からの留学生は試験がなく、他の地域の留学生には試験があったようである¹⁴。

二 奈良女高師の「満州国」留学生

1 奈良女子大学学生課が作成した「中国人留学生卒業生・退学者名簿」の再確認と補充

筆者は博士課程在学中の1996年に奈良女高師の中国人留学生の資料を収集するため、奈良女子大学の学生課に協力を求めた。学生課の担当者は数カ月かけて、奈良女高師の「中国人留学生の卒業名簿」と「中国人留学生の退学者名簿」（以下「学生課名簿」と略称）¹⁵を作成し、提供してくださった。それは、奈良女高師の留学生に関する一番重要な基礎資料である。しかし、「学生課名簿」は、膨大な在籍簿から抽出したものであったから、遺漏のあるのは仕方がない。「学生課名簿」を、駐日満州国大使館が作成した各年度の『満州国留日学生録』（以下『学生録』と略称）の記録に照合した結果、「学生課名簿」には、いくつか記録されていない内容が見られた。下記の〈表3〉の名簿は「学生課名簿」から「満州国」留学生を抽出したものであるが、全員が予科を修了していたので「学生課名簿」にある「予科修了」の欄は削除した。『学生録』の記録により補充した処は、〈表3〉で（黒字）にし、費用は『学生録』により判明したので、〈表3〉に費用の欄を加えた。

〈表3〉 奈良女高師の「満州国」留学生卒業生・退学者名簿

氏名	出身地	出身学校	生年月日	入学年月日	専攻学科	卒業年月日	費別
郭道濤(金花)	関東州*	旅順高等公学校	1914. 5.28	1935. 4.10	家事科	1939. 3.24	官
関秀蓮	吉林省*	吉林省立女子師範学校	1917. 5. 6	1936. 4.10	理科	1940. 3.20	官
常淑慧	奉天省*	東京昭和高等女校学校	1916.12.27	1935. 4.10	家事科	〃	自→文費
戴玉僊	〃*	哈尔滨市立女子第二高級中学校	1919. 6. 4	1938. 4.10	理科	1941.12.24	官
高淑芬(芳)	〃*	新京特別市立女子中学校	1920. 9.26	1939. 4. 8	文科	1942. 9.30	自→官
田琳	龍江省*	龍江省立齊々哈尔女子師範学校	1919. 9. 5	1938. 4.10	〃	〃	官
趙貴文	吉林省*	新京特別市立女子中学校	1921. 6. 7	1939. 4. 8	理科	〃	官
賈維一	〃*	北平大同中学校	1918.12. 3	1938. 4.10	〃	〃	官
陶德滋	奉天省*	新潟県長岡女子師範学校	1918.11. 5	1939. 5. 8	家事科	〃	官
王孝華	龍江省*	龍江省立齊々哈尔女子師範学校	1922. 6.29	1940. 4.10	文科	1943. 9.30	官
初慶芝	吉林省*	新京特別市立女子中学校	1920. 5.12	1939. 4.10	〃	〃	官
蕭慕清	奉天省*	新京留学生予備校	1920.11. 1	1940. 4.10	理科	〃	自→官
高尚樸	奉天省*	奉天省立女子師範学校	1920.12.27	〃	家政科	〃	自→官
胡書雲	〃*	〃	1920. 6.16	〃	〃	〃	自→官
常宗琳	〃*	〃	1921.10.13	〃	〃	〃	官
郭以明	〃*	〃	1921.10.16	1941. 4.10	文科	1944. 9.30	自→官
金毓華	〃*	新京留学生予備校	1920.10. 9	〃	〃	〃	自→官
張淑蘭	〃*	〃	1920.12.20	〃	理科	〃	自→官
胡鳳雲	牡丹江省*	哈尔滨高等女学校	1923. 5. 4	〃	〃	〃	自→官
張秀英	錦州省*	奉天省立奉天女子師範学校	1918.12. 8	〃	〃	〃	自→官

李蔭情(清)	奉天省*	新京留学生予備校	1921. 9.29	〃	家政科	〃	自→官
高素威	河北省*	大連昭和女高校	1924. 2. 2	1942. 4.10	文科	1945. 9.30	官
李蔭廉	奉天省*	国立留学生予備校	1922. 9. 9	〃	家政科	〃	官
孫蘭香	閩東州*	旅順高等公学校	1923. 9.14	1944. 4.10	理科	1948. 3.15	官

氏名	出身地	出身学校	生年月日	入学年月日	専攻学科	退学年月日	費別
李潤萍	吉林省*	北平私立弘達学校	1918. 8.26	1937. 4.10	文科	1938. 4.21	自
夏玉芝	山東省(閩東州)*	閩東州高等公学校	1914. 3.18	1938. 4.10	〃	1939. 6.20	官→私費
王翠娥	錦州省*	吉林省立吉林女子師範学校	1918. 3. 5	〃	〃	1939.11.14	官
戚恩貴	閩東州*	旅順師範学堂	1911. 4.21	1936. 4.10	家事科	1940.12.28	自→官→自
張 嬪	奉天省*	奉天省私立坤光女子兩級中学校	1921. 2.26	1939. 4. 8	文科	1941. 4. 9	自
程季春	〃*	奉天女子師範学校	1921. 3.27	1941. 4.10	理科	1942. 6.12	自→官
劉棟萼	〃*	省立奉天第一女子国民高等学校	1921.10.22	1940. 4.10	文科	1943. 6.26	自→官
博丕齡	興安南省*	新京留学生予備校	1920. 6. 3	〃	理科	1943. 7.17	自→官
閻樹旻	安東省*	〃	1923. 2.13	1941. 4.10	文科	1944. 1.10	自→官
郭存愛	北安省*	哈尔滨女子国民高等学校	1920. 9. 9	1942. 4.10	〃	1944. 3.31	自→官
洪深源	奉天省*	国立留学生予備校	1922. 5.20	〃	理科	1945. 4. 1	官
王学榮	龍江省*	〃	1922. 2.12	〃	文科	1946. 3.31	官
楊秀竹	奉天省*	新京留学生予備校	1921.12. 1	〃	〃	〃	官
王菊釵	錦州*	留学生予備校	21 歳	1943. 4.10	理科	〃	官
賈玉芹	〃*	吉林女国高校	20 歳	〃	文科	〃	官

*:「満州国」留学生。

注:「出身学校」の欄の「新京留学生予備校」、「国立留学生予備校」、「留学生予備校」は、同じ学校である。

「学生課名簿」によれば、1945年の卒業生であった高素威は「満州国」の留学生にされていない。その理由は、出身地が河北省になっているからだと思われる。彼女が「満州国」の官費生であったことは『学生録』で判明した。高素威は、天津の出身であるが、父親の仕事の関係で、2歳から大連で暮らしていた。公学堂を卒業した後、日系の大連昭和高等女子学校に進学した。奈良女高師の卒業生であった数学の田中菊枝先生の勧めで、高素威は留学生認可試験を受け、「満州国」の留学生として日本にやってきた¹⁶。

「学生課名簿」では、退学者の夏玉芝、王菊釵、賈玉芹三人にも「満州国」留学生の*印がなく、王菊釵と賈玉芹の出身地も空欄となっていた。『学生録』によって、三人が「満州国」の留学生であったこととその出身地も明らかになったのである。

名簿には退学者がかなり多く、その理由もさまざまであった。閻樹旻の場合は、母が危篤だという電報を受けたため、急いで準備して、泣きながら帰国してみると、母親は元気であった。実は、戦況が厳しくなってきた日本から娘を呼び戻すのに、母が嘘をついたのだという¹⁷。

「学生課名簿」の〈表1〉退学の年月日の記載は、退学者の学校を離れた日付ではなく、学校が退学を決定した日付である。そのため、閻樹旻の帰国は1943年末であったのに、1944年1月となっている。王学榮は1944年初夏に帰国したが、〈表3〉には1946年3月31日と記載されている。

「学生課名簿」に名前がなく、『学生録』に記載されている本科生が3名いた。〈表4〉の3名の学生は、「学生課名簿」を作成する際に遺漏したと思われる。

〈表4〉「満州国」留学生（本科）名簿（〈表3〉の補充）

氏名	年齢	本籍	科別	学年	入学年（昭和）月 （予科を含む）	卒業予定	出身学校	費用	出典
李淑慎	21	錦州	理	1	14・4	19・3	錦州省立女子国民高等学校師範部	官	①
金聖積	23	間島	文	2	〃	〃	間島省龍井街明信高校	〃	②
韓明熙	21	間島	理	2	〃	〃	間島省立光明高校	〃	〃

出典：①駐日満州国大使館『満州国留日学生録』1940年度，74頁。

②駐日満州国大使館『満州国留日学生録』1943年度，66頁。

「学生課名簿」には、予科が含まれていないが、『学生録』には予科の学生も記載されていた。『学生録』に予科しか記録がない留学生を〈表5〉にまとめた。

〈表5〉1941年度と1943年度『学生録』の予科生¹⁸名簿

氏名	年齢	本籍	科別	入学年（昭和）月	卒業予定	出身学校	費用	出典
張素卿	21	吉林	豫	16	20	吉林省立吉林国民高等学校 留学生予備校	官	①
熊振羽	23	錦州	〃	〃	〃	錦州省立錦州女子師範学校	〃	〃
韓郁吉	21	四平	〃	17・4	22・9	留学生予備校	〃	②
王興榮	18	竜江	〃	18・4	〃	留学生予備校	〃	〃
王進俠	19	新京	〃	〃	〃	留学生予備校	〃	〃
徐秀靈	19	間島	〃	〃	〃	留学生予備校	〃	〃
孫蘭香	21	関東	〃	〃	〃	撫順高等師範女子部	〃	〃

出典：①駐日満州国大使館『満州国留日学生録』1941年度，101頁。

②駐日満州国大使館『満州国留日学生録』1943年度，66頁。

1942年度の『学生録』がまだ見つからないので、張素卿と熊振羽が本科に入学したかどうかについては判断できないが、1943年度の『学生録』には載っていない事実から、1943年までに学校をやめたのではないかと考えられる。2人以外のあとの5人は、王興榮の回想によると、韓郁吉（記憶になり）を除いて4人とも本科に進学し、王興榮と孫蘭香は理科で、徐秀靈と王進俠は文科であった。他には、1943年までの『学生録』に名前がない梁玉卿も一年後輩の劉士儀も在学していたことがわかった¹⁹。

以上のデータは、奈良女高師の学籍簿と照合する必要がある。

2 広島文理科大学に進学した「満州国」留学生

奈良女高師の「満州国」留学生の中に卒業後に帰国せず、広島文理科大学に進学した者が5人いた。

〈表6〉 広島文理科大学へ進学した奈良女高師の「満州国」留学生

氏名	入学年月	専攻	卒業年月	備考
趙貴文	1942, 9	化学	1945, 9	1945年夏帰国
初慶芝	1943, 9	西洋史	1946, 9	広島原爆被爆者, 1950年帰国
張淑蘭	1944, 9	数学		1945年春の空襲で死亡
張秀英	1944, 9	生物		広島原爆で死亡
洪深源	1945	?		入学後, すぐ帰国

- 出典：①駐日満州国大使館『満州国留日学生録』1943年度, 80頁。
 ②瀋殿成主編『中国人留学日本百年史』下冊, 遼寧教育出版社, 1997年, 630頁。
 ③2010年1月10日付, 筆者の趙貴文へのインタビューによる。
 ④2009年8月27日付, 閻樹旻から筆者への手紙による。

1943年度の『学生録』によって趙貴文と初慶芝の入学年度と専攻が確認できたが、他の3人のデータは、趙貴文、王興榮へのインタビューによるものである。

趙貴文は、中国で有名な化学者であり、中国科技大学の教授であった。彼女は、1937年に留学試験に合格し、1938年初めに官費生として初慶芝と二人で来日した。奈良女高師に入学できるまで、東京にいる留学生の先輩龔自祿の下宿に泊まっていた。

奈良女高師に入学後、一年の特設予科を経て、趙貴文は理科に初慶芝は文科に進んだ。趙貴文は、1942年9月に奈良女高師を卒業し、広島文理科大学に進学した。初慶芝は家庭の都合で数か月中国にとどまった時期があったため、自分の意思で一年留年した。1943年9月に初慶芝も広島文理科大学に入学したのだったが、しかしそれが運命の分かれ目になったと趙貴文は言った²⁰。つまり、一年遅れのため、原爆に遭ったのである。

初慶芝は、原爆被爆者なので、いくつかの取材を受けたことがあり、被爆についての文章も残されている²¹。爆心地から1500メートルに位置していた広島文理科大学の構内は、鉄筋コンクリートの文理大本館と図書館及び付属国民学校の校舎が倒壊しなかったため、その時図書館にいた初慶芝はけがをしたものの、助かったのである。

張淑蘭、張秀英と洪深源の三人については、関係資料が少ない。幸い、1943年に留学生たちが撮った一枚の記念写真に張秀英と張淑蘭の姿が映っている。



写真1 後列：張秀英（中），張淑蘭（右） 王興榮提供

1944年8月に張淑蘭が王興栄に書いた言葉が、王興栄の寄書帳に残されている。それは、広島文理科大学に進学する直前のことだと考えられる。1945年初夏に、空襲に遭った張淑蘭は学校の建物の下敷きになって亡くなった。その後、趙貴文は帰国に際して、張淑蘭の遺灰を持ち帰り、彼女の兄に渡した²²。

張秀英は原爆で命を落とした。当時、広島に十数名の留学生がいたが、生き残ったのは初慶芝、由明哲、王大文などの5人だけである²³。

洪深源について、高素威は「二人はもともと一番仲が良かったが、その後、選んだ道が違うと言われ、離れるようになった²⁴」と言った。「選んだ道が違う」とは、洪深源は紅軍（共産党系）に参加し、高素威が、国民党の黨員になったので、政治の道の違いという意味であった。高素威のアルバムには二人が他の留学生と一緒に撮った写真が数枚ある。二人は50年代に一度だけ北京で会ったことがあり、その時の洪深源は、北京の某研究所で働いていたようである²⁵。王興栄の寄書帳には、洪深源による「暴風雨は終わるときがあり、曙の光がもうすぐ出現するだろう²⁶」という意味深い言葉が書かれている。「それは抗日戦争は中国がもうすぐ勝利するという意味です」と王興栄は筆者への手紙に書いた。

この事実から「満州国」女子留学生の中にもほかの地域の留学生と同様に、日本との抗戦に参加した者のいたことが伺える。

3 帰国後の「満州国」留学生の行方

〈表7〉 奈良女高師「満州国」留学生（一部）の進学（転学）先と主な勤め先

氏名	進学・転学先	主な職場	出典
趙貴文	広島文理科大学	中国科学技術大学 化学教授	④
初慶芝	広島文理科大学	山東師範学院 教員 吉林大学 職員	②④
王孝華		政治家、台湾の立法委員	⑤⑦
郭以明		大連外国語学院 教員	③
胡鳳雲		吉林工学院 化学教員	①⑤
李蔭情（清）		瀋陽第18中学	①③
李蔭廉		瀋陽建工学院外語研究室 教員	①③⑤
閻樹旻		唐山市啓新中学、河北省冀東コンクリート工場の日本語教師、翻訳	①③
王学栄		台湾宜蘭省立蘭陽女子中学 教員	⑤
楊秀竹		内モンゴル財經学院	①③
高素威		天津南開大学 職員	③⑥
賈玉芹	長春女子師範大学	吉林社会学院経報研究所	①③
王菊釵（笠）	吉林東北大学	中国社会科学院工業經濟研究所	①③⑤
韓郁吉		瀋陽市第2中学	①③
王興栄	台湾大学、テキサス・テック大学	香港中文大学 教員	①⑤
徐秀靈		武漢大学歴史系 教員	①③⑤
劉士儀	京都大学	北京建工部？	⑤

- 出典：①留学生予備校同窓会編『留学生予備校同学録』1999年5月。
②潘殿成主編『中国人留学日本百年史』下冊，630頁。
③2009年12月29日，筆者による閻樹旻へのインタビューによる。
④2010年1月10日，筆者による趙貴文へのインタビューによる。
⑤2010年2月～9月，王興榮からの手紙とインタビューによる。
⑥2010年8月20日，筆者の高素威へのインタビューによる。
⑦『維基百科，自由的百科全書』<http://zh.wikipedia.org/zh-tw/>。

三 事例紹介—王興榮を中心に—

奈良女高師の「満州国」留学生へのインタビューを実施することができたのは、趙貴文、閻樹旻、高素威と王興榮の4名であった。留学時期から見ると、一番遅かったのは王興榮であった。彼女は、1945年8月に船で帰国しようとしていたのに、結局中国に戻れず、一年以上も戦後の日本にとどまらざるをえなかったのである。王興榮の戦後期の貴重な体験により、元「満州国」留学生を含めて中国人留学生の生活実態などが一部明らかになった。

筆者は、2009年2月に元奈良女高師の「満州国」留学生であった王興榮と連絡が取れて以来、文通や電話及びインタビュー²⁷によって、事例調査を行なうことができた。以下は、その調査のまとめである。

漢民族である王興榮は1926年7月3日（旧暦）黒竜江省チチハルに生まれた。北京大学の卒業生であった父親はチチハル両級中学校長であった。彼女は9人きょうだいの5番目であり、2人の兄と姉は日本へ留学していた。王興榮は、チチハル市寿光小学を卒業してから、チチハル市女子国民高等学校に進学した。その後、「満州国」の留学生予備校に合格し、第6期生として卒業した。1943年初めに150名前後の留学生とともに同じ船で来日し、4月から奈良女高師特設予科に入学して、翌年、理科（数学科）に進学した。家庭の影響もあり、王興榮は留学して教員になるのが目的であった。

1943年4月に王興榮が奈良女高師の特別予科に入学した時、姉の王学榮は奈良女高師の二年生であった。王学榮は、「満州国」留学生予備校の第4期卒業生として1941年来日し、特設予科を修了してから、文科（文史科）に進学した。三年生になった1944年初夏に、母親は王学榮を結婚させるため故郷に呼びもどして、その後、婚約者がいる上海に行かせて結婚させた。



写真2 王興榮と王学榮 王興榮提供

1944年後半、日本本土も戦場となってきた。姉も帰国してしまい、王興栄は帰国したいと何回も生徒主事に相談したが、いつも船がないという理由で断られた。1944年秋に王興栄、孫蘭香、劉士儀、梁玉卿の4人は、学校の許可をもらえないまま大阪医専の男子学生とともに、大阪に行って、帰国の船のチケットを購入した。しかし、無断で県境を越えたために、特高課に呼ばれ、2時間ぐらい拘留された。釈放された直後、奈良公園で撮ったのが写真3である。結局、4人は、学校に帰国が認められず、学校に留まっていた。



写真3 左から 劉士儀、王興栄、梁玉卿、孫蘭香 奈良公園にて（1944年秋） 王興栄提供

当時、学校で授業は行われず、日本人の学生は軍事工場などで働いていたが、留学生たちは別行動であった。時には戦場から戻されてきた大きな蚊帳を繕い直したこともあったという。配給の食糧が少なく、彼女たちは、中国から持ってきたお砂糖や石鹼を持って、農村に行っては、物々交換の形で大根や柿、桃などをお腹がいっぱいなるまで食べたこともあった。

関西も空襲があったため、1945年夏に「満州国」公使館から奈良女高師の留学生を帰国させる知らせが学校に届いたらしく、奈良女高師でも「満州国」留学生の帰国が許された。

1945年8月7日に京都周辺にいる20数名の「満州国」留学生は、新潟港から船に乗り、満州へ向かって出港した。船には海軍や千名の軍事工場の労働者なども乗っていた。船は、いくつかの港に寄ろうとしたが、魚雷があるため寄港ができなかった。その最中に船の軍の無線電で日本が投降したことを知り、日本海で長く漂流していた船は、結局敦賀港（8月17日）に戻ってきたのである。

その後、王興栄は、20数名の元「満州国」留学生とともに、京都に戻り、元「満州国」の留学生寮に泊まって、帰国できる日を待ちながら、戦後の日本での生活が始まった。

当時京都には二つの留学生の寮があり、それらは「満州国」留学生寮の「一徳寮」と関内留学生寮の「吉田学寮」であった。戦後、それぞれ「卿雲寮」と「光華寮」とに改名されていた。

1945年夏に敦賀から京都に戻って「一徳寮」に泊まっていた元「満州国」留学生は、全部で23名（女性7名、男性16名）であった。入居後、彼らは、寮の名前を「卿雲寮」に変えた。日本人の老夫婦が留学生の食事などの世話をしていた。長い寮生活をしている間に、元留学生の中には、恋人になった者もいたし、結婚した者もいた。1966年に王興栄が京都を再訪した時、「卿雲寮」は「黒目医院」となっていたという。



写真4 一列の左から 劉士儀, 関玉徳, 梁玉卿, 蕭致遠, 王興榮, 孫蘭香, (盧碧賢)
二列の女性は, 日本人の記者である。
京都吉田山の「卿雲寮」にて(1946年) 王興榮提供

王興榮は, 1946年10月に上海に, 梁玉卿は, 1947年に瀋陽に帰った。孫蘭香は, 同じ寮に住んでいた楊慶宝と結婚し, 日本に留まっていた。劉士儀は, しばらく神戸華僑小学校に勤めた後, 京都大学化学科に進学した。

蕭致遠, 盧碧賢, 関玉徳の3人は, 奈良女高師の学生ではなく, 他の女学校の留学生であった。劉士儀から王興榮への手紙には, 3人とも1947年以後に帰国したと書いてあった。

関内の留学生寮であった光華寮(元吉田学寮)は百人以上を収容できる大きな施設である。1945年10月10日に中華民国の建国記念日である「双十節」を祝う集会があり, 元留学生たちは, 「光華寮」に集まり, 出身地(満州, 台湾, 関内)と関係なく, 一緒に祝賀活動を行なった。曹禺の「雷雨」が上演され, ヒロインの「四鳳」を演じたのは, 奈良女高師の北平(北京)からの留学生王日和であった。王興榮を含め, 元「満州国」の女子留学生の殆どは, 「双十節」という言葉を聞いたのはその時が初めてであった。

終戦と同時に「満州国」が滅亡した。留学生たちは, 官費も無くなり, 家族との連絡も絶えた状態に陥ってしまった。日本人と同じように食品配給で半飢餓状態の時期があったが, 東京に中華民国駐日代表団が来てからは, アメリカ軍からの配給が始まり, 日本人より食料などが充足していた。更に生活のあらゆる面も無料になっていた。

戦後, 元「満州国」留学生も台湾の留学生も中国人留学生になり, 国民党の党旗の模様(青天白日)のバッチをつけていれば, 汽車に乗るのも, 演劇を見るのも無料であった。王興榮は, 他の留学生とともに宝塚の演劇を見たことがあった。彼女は帰国の為に東京にある中華民国駐日代表団を何回も訪ねた。

当時の中華民国駐日代表団団長は朱世明であり, 留学生事務を担当していた文化組の組長は張鳳挙で

あった。王興栄は、姉の上海からの手紙²⁸を持って、張鳳拳に上海に帰りたいと申し出ていた。当時、日本と中国間の殆どの交通手段は不通であったが、政府関係者などの往來の為に、飛行機があった。

王興栄の飛行機での帰国を許可した張鳳拳は、上海へ飛ぶ飛行機は不定時で人数制限があるから、ときどき様子を見に来なさいと言った。以来、王興栄は東京に行くたびに留学生寮である「神田寮」に泊まった。そこには元「満州国」留学生が多く、河北からの留学生もいた。二三日程度なので、初慶芝の部屋に泊まったり、由明哲の部屋を譲ってもらったりしていた。帰国する前に、王興栄は、中華民國駐日代表団が発行した学歴証明書もらった。

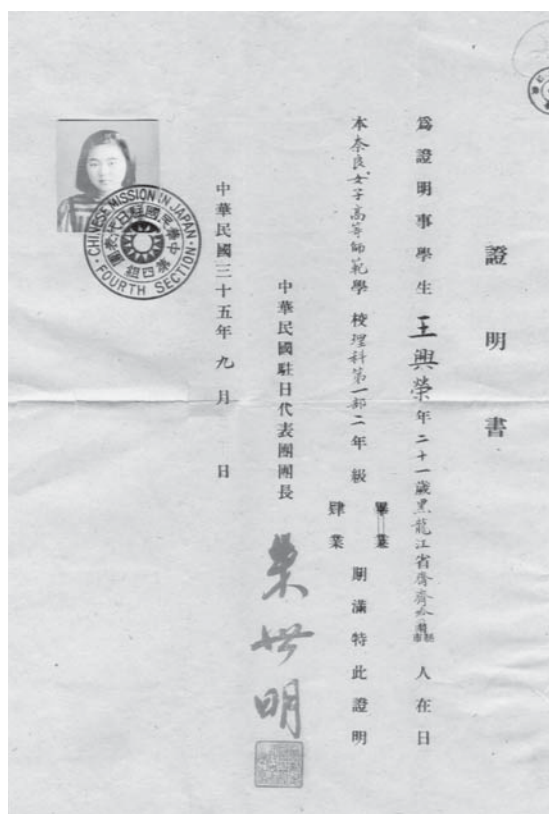


写真5 王興栄の学歴証明書 王興栄提供

飛行機に空きがあって王興栄が上海へ帰ったのは、1946年10月のことであった。その飛行機は、軍事用のB24であったから、政府関係者も軍人も全員荷物箱の上に座っていた。

上海に戻った王興栄は、すでに南京に引っ越した姉夫婦を探すために、苦勞の連続であった。それでも、見ず知らずの人々に助けられて、ついに姉と再会することができた。引き続き勉強がしたいと思っていた彼女は、1947年2月から1948年9月に南京金陵大学で勉強していたが、一家の家計を支えていた義理の兄が台湾にいる友人に誘われて、台湾へ行くことを決めたため、学業は再び中断された。

王興栄は、台湾に行ってからも学業を続けたくて、義理の兄の援助を受けながら、1949年1月に台湾大学数学学科に入学し、1951年6月に卒業した。その後、1957年まで台中女子中学、台南工學院の数学教師として務め、1957年9月からはアメリカテキサス・テック大学 (Texas Tech University) に留

学し、1959年8月修士号を取得した。1964年までアメリカの数か所の大学で数学助教をしながら、博士課程を続けていた。

アメリカ留学中に王興栄は香港中文大学に誘われ、1964年に香港へ渡った。以来、数学教員として、1986年まで香港中文大学に勤めた。仕事が忙しかったため、博士学位を取得することができたのは、退職後の1989年である。

王興栄の姉王学栄は、台湾へ行ってから、10年近く子育てに専念していた。1956年から、台湾宜蘭省立蘭陽女子中学の教員（国文、地理、歴史）になり、以来30年近く働いていた。教員になるためには資格が必要なので、王学栄は、母校の奈良女子大学に手紙を出して、自分の事情を説明し、本科三年課程を修了した証明書がほしいと申請した結果、卒業証書が届けられた。晩年の王学栄は、子供たちがいるアメリカへ移住し、2004年10月4日に亡くなった。

1993年にカナダのバンクーバーへ移住した王興栄は、今もその地で元気で暮らしている。

まとめ

奈良女高師は「満州国」女子留学において一番重視されていた留学先であり、また学席制の指定校でもあった。奈良女高師は積極的に「満州国」留学生を受け入れて、日本人学生と同じような師範教育を行なった。奈良女高師の「満州国」留学生は、帰国後、政治家になった者もいたが、殆どの者は学校や研究機関等に勤務していた。

一方で「満州国」の女子留学生は、戦乱に巻き込まれた時期が長く、戦争の被害者でもあった。彼女たちの中には、戦乱をさけるため、学業を中断して帰国した者も少なくなかった。日本に残って命を落した者もいたし、戦争が終わってからも、帰国する交通手段がなく、数年間国に戻れなかった者もいた。さまざまな留学経験を持つ彼女たちが、帰国後歩んだ道は多様であった。これについては、さらに調査を進め、「満州国」女子留学生についての歴史の記憶として残しておきたい。

本研究は科研費（課題番号：20510255）の助成を受けたものである。

謝辞：本研究の史料収集とインタビュー調査にあたって、元留学生及びその家族、中国と日本の研究者そして同僚の皆様、家族からも多大な協力をいただきました。さらに、資料調査にあたり、日本大学理工学部図書館にたいへんお世話になりました。ここに心から御礼申し上げます。

注

- 1 「学部咨留日女生酌定補官費辦法札飭提学司遵照文」『大清法律大全卷』17, 教育部, 游学生, 9頁。
- 2 国務院文教部編纂『満州帝国文教部第二次年鑑』1935年12月, 1頁。
- 3 満州帝国民生部『第二次民生年鑑』1940年, 32頁。
- 4 外務省記録『満州国文教部派遣留学生関係雑件（教員留学生）』第1巻。
- 5 満州帝国民生部『第四次満州帝国文教年鑑』1938年, 22頁「高等専門学校一覧」。
- 6 民生部令第69号, 「師道高等学校規程」, 『政府公報』1938年6月24日。
- 7 民生部令第23号「師道大学規程」, 『政府公報』1942年4月27日。
- 8 王興栄のアンケート調査票による。
- 9 拙論「[満州国]における女性の日本留学一概況分析」中国研究所『中国研究月報』2010年9

月号を参照。

- 10 奈良女子大学附属図書館所蔵校史関係資料 19「特設予科・外国人特別入学」7「特設予科規程」。
- 11 同上。
- 12 『留学生予備校一覧』1941年1月～1942年5月，80～82頁。
- 13 2009年12月29日，筆者の閻樹旻へのインタビューによる。
- 14 2010年8月25日，筆者の山西省元留学生である賈瓚へのインタビューによる。
- 15 周一川『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会，2000年，157～158頁。
- 16 2010年8月20日，筆者の高素威へのインタビューによる。
- 17 2009年12月29日，筆者の閻樹旻へのインタビューによる。
- 18 現在，1942年度と1944年度（出版されたかどうかについては不明）の『学生録』はまだ見つからないので，〈表5〉の予科生が，翌年本科に入学したかどうかについては，同『学生録』では判断することができない。
- 19 2010年6月24日と7月9日，筆者の王興榮への電話インタビューによる。
- 20 2010年1月10日，筆者の趙貴文へのインタビューによる。
- 21 劉池明「広島原爆の生存中国女性」（「在広島原爆中幸存的中国女人」）『週末』1995年8月12日；薛立永・謝復立「広島原爆からの生存者」（「広島原子弾幸存者」）2004年9月22日，『中国婦女網』www.women.org.cn など。
- 22 2010年1月10日，筆者の趙貴文へのインタビューによる。
- 23 同上。趙貴文は8月前にすでに帰国したので，当時の状況について初慶芝から聞いたと言う。
- 24 2010年8月20日，筆者の高素威へのインタビューによる。
- 25 同上。
- 26 原文：「暴風雨終有平靜的時候，曙光就要出現了。」
- 27 2010年9月9日，10日，11日，13日にカナダのバンクーバー在住の王興榮自宅などで行なった。
- 28 終戦前後の長い間，日本と中国は殆ど音信不通の状態になっていた。1945年上海にいた王学榮は，港で日本に帰る日本人男性に日本にいる妹に手紙を出してくれと頼んだ。その手紙が奈良女高女高師に届いた時に，学校は休校状態だったので，王興榮はすぐに手紙をもらうことができなかった。授業が再開してから，復学した関内の留学生である果素英が手紙を王興榮に渡してくれたのである。